

こころの玉手箱

30年ほど前フィリピンへ

ある。

学生たちを連れてワークキャンプに出かけた際、海辺で花びらのような模様のついた白い殻をみつけた。長径が13センチほど。あんぱんのような形をしている。たまたま同行していた生物学の教授が、ああこれは「タコのマクラ」だよ、と教えてくれた。日本の海岸でも見られるそうだが、わたしも学生たちも初めて目にする不思議な代物だった。海の下底でのごんびりと昼寝をしているタコの姿が思い浮かぶ、いかにも楽しい名前である。しかし2度目にやってきた日本人は、こうして村のために一緒に木を植えて平和を祈る若者たちだった。村の長老たちはそう言って喜んでくれた。



学生を連れてのワーク
キャンプで見つけた

長老たちの言葉は
学生たちの胸に重
い問いかけを残したよ
うだった。過去の日
本人が行ったこと
に、今の自分はどう
だけ責任を負うの
か。そう問うことで、
彼らは否応なく自分

フィリピンでの問いかけ

が日本人であることを悟る。あまりに違う彼我の生活を見て、さらには都会の貧困地域に住む子どもたちの暮らしぶりを見て、いたい自分はどうしたらよいのだろう、と取り乱す学生もいた。何かはわからない。けれども彼女はそのとき、何者かからの問いかけを受けていたように思う。そして、必死にそれに答えようとしていた。

その後の人生の中で、この学生がどういう答えを出したのかはわからない。けれども、彼女はたしかにその時、1人の個人として自分を背負って立つ責任を自覚したことと思う。それはおそらく、大学で学生が学びうる最高の学びである。

もっとも、わたし自身がいちばんよく覚えているのは、村の人と毎日一緒に食べた食事のことだ。白いご飯に魚の煮付けと甘く熟したマンゴー。朝も夜もまったく同じ質素な内容だったが、おいしくてちっとも飽きなかった。

海辺で見つけた「タコノマクラ」